村　章

制定／昭和44年9月30日

「北」の文字を図案化して"山"形を構成し、北山村を端的に表明するとともに、村民相互の友愛と協力の意欲、さらに光栄と発展を表現している。

全国唯一の飛び地の村 北山村

この地を紹介するには、木と水が欠かせません。
林業が主幹産業として栄え、
その輸送手段として
激流を下る筏師の技が磨かれました。
現代はその筏が観光の主役として村を支え、
新たな雇用を生み出しています。
さあ、次のページを開いてください。

心豊かに暮らす人々と北山村を
紹介していきます。

村の花
「石南花（シャクナゲ）」

村の木
「じゃばら」

【目 次】

北山村概要・目次 …… 1-2
観光筏下り …… 3-4
平成の筏師 …… 5-6
観光 …… 7-8
産業　じゃばら …… 9-10
じゃばら加工品 …… 11-12
村長インタビュー …… 13-14
教育 …… 15-16
林業 …… 17-18
福祉 …… 19-20
防災 …… 21
行政 …… 22
北山村の四季 …… 23-24
ごあいさつ …… 25
イラストマップ …… 26

【沿 革】

明治4年　廃藩置県が実施され、新宮が和歌山県に編入された際、地理的に言えば奈良県に属するところを新宮木材業者と共存共栄の関係であったことから村民の意見を聞きいれ、和歌山県に編入された。明治22年七色、竹原、大沼、下尾井、小松の5つの村が合併し北山村と改称施行された。全国唯一の飛び地の村。

【位 置】

紀伊半島の中央部に位置し、南は三重県、北は奈良県に囲まれた東西20km、南北8kmの小さな村。

【気 候】

温暖多雨で年平均気温が15.2度。寒暖の差が大きい。

【アクセス】

電車・バスを利用の場合
●新大阪から
紀勢本線（約4時間）特急→新宮駅
紀勢本線（約30分）各駅列車→熊野市
北山村村営バス（60分）→北山村

●名古屋から
紀勢本線（約3時間）特急→熊野市
北山村村営バス（60分）

車を利用の場合
●大阪から
南阪奈道路→大和高田バイパス（橿原）→
R169→北山村

●名古屋方面から
東名阪自動車道→伊勢自動車道→
勢和多気I.C→尾鷲北I.C→R42号→
R309号→R169号→北山村

筏流しが観光筏下りになるまで

川の中に道をつくり、
岩をすり抜け、
見事な櫂さばきを
みせる筏師。
600年の北山の技を
今も繋ぐ。

日本有数の多雨地帯である大台ケ原を源流域とし、上流部は吉野熊野国立公園の一部となっている北山川は、豪雨と急流により削られた深い渓谷が続く一級河川。奈良県、三重県、北山村を抜け新宮市で熊野川と合流し熊野灘に注ぐ。

北山村の筏流しの歴史は約600年前に遡ります。文献として残っている「北山由緒記」によると「慶長元年（1596年）7月に京都地方を襲った大地震の中、北山産の木材を使った伏見城の一部は微動だにしなかった。これを喜んだ豊臣秀吉は、村に「北山郷御材木所」の朱印状を交付した」とあります。さらに慶長9年（1605年）、徳川家康が江戸城本丸を建てた時やはり北山材を使ったと記されています。これらの材木を新宮まで運んだのが北山村の筏師なのです。ダムができるまでの北山川は鋭角にむき出した岩や激流、荒滝の連続。戦後復興で材木の需要がピークを迎える昭和30年代には、50メートルから60メートルの長さの筏を流したのです。（卓越した技術は日本一といわれ、明治時代には日本企業が開発を進める満州や朝鮮半島にまで、その技術をかわれ大沼地区の筏師が何回も行ったと記録が残されています）季節や天候によってその姿を変える北山川の流れを瞬時に読み取り判断して櫂をさばく筏師は、多い時には500人もの人がおり北山村を支えていました。筏師は筏に乗るだけではありません。3年間の修行時に木の種類によって筏の組み方を覚えます。夏の渇水時には岩に乗り上げた筏をばらし、また組み直すという作業もあるのです。昭和40年のダム建設と道路の改良もすすみ材木の運搬が陸路に変わる時代とともに、筏師の仕事も終わりの時を迎えます。しかし、北山筏の技術を絶やすわけにはいかない。また、林業自体が衰退していく中、これからの村を支える産業を作らなければいけないと、筏の技術を観光資源に変える取り組みが昭和52年から始まりました。筏に観光客を乗せるのは危険だと、許可がおりるどころか中止せよという連絡がくるほど困難な道のりでした。やがて観光筏を小型船舶とする登録作業やダムの放水を一定にすると同時に多くの岩を発破で動かして安全な水路を作るなどしました。さらには船の規則にはまるように筏の設計を変えたのもかつての筏師達です。やがて昭和54年に「観光筏下り」がスタートしました。櫂を使って筏を操るのは日本全国でも、ここ北山村だけ。山と川を財産とし、大自然の営みとともに村を支えた筏の伝統技術は、観光客の安全を第一にした観光筏下りとして北山村を代表する観光資源となって継承されています。平成26年2月に村の無形文化財に登録されました。

涼を求めて北山の水とあそぶ

平成の筏師

先人たちの努力と熱意で昭和54年にスタートした「観光筏下り」は、5月～9月までの5ヶ月間、1日2便の期間限定のものです。材木の輸送手段として600年の歴史ある筏流しが、今では村を代表する観光資源となり日本全国から多くの観光客が訪れるようになりました。現在13人の筏師さんはUターンやIターンの方がほとんどで、かつての筏師さんから直々に指導を受けています。リーダーの山本正幸さんは「筏に乗れるようになるまで3年はかかります。こういう時はこうしなさいといったマニュアルのようなものはないんです。体で覚えていくもので、職人と同じです。山に暮らし、川に生きたかつての筏師達の伝統技術を私達は絶やすことなく繋いでいきたいと思っています。それが観光客のみなさんに喜んでもらえるなら、こんなにありがたい仕事はないです」川の道は一定ではなく、大雨の後には石や岩の位置も変わります。アップダウンあり、水しぶきをかぶったり膝まで水に浸かったり。やがておだやかな流れの中、すがすがしい風や木々の匂い、鳥のさえずりなど奥熊野ならではの空間にすっぽりと身をおくことができるのも「観光筏下り」の魅力です。「終点に着いた時、お客様から拍手をいただくことがあります。景色がすばらしい、日本ではないみたい、ありがとう、また来ます、など声をかけていただくと本当に嬉しいですね」北山村の観光PRのために各地イベントにも筏師自ら出かけることもあります。「この北山村を知らない人もまだまだ多いのが現状です。知名度をさらにアップしたいですし、私達自身ももっと筏の技術とともにおもてなしの気持ちを磨いていきたいです」観光を柱とする北山村を支えているのは一人ひとりの住民。今後も後継者を育成するため全国に筏師候補者を募り、公営住宅の建設など定住の促進に取り組んでいきます。

北山な村人

山本 正幸 さん

現在、20歳代～40歳代の筏師達のリーダーを務める山本さんは、シーズン中は筏に乗り、シーズンオフには北山村の知名度を上げるためにさまざまなイベントにもでています。またIターンの人達には仕事だけでなく生活全般の相談にものり「筏の技術とともに北山村の暮らしも一緒に伝えていきたい」と話す頼もしい存在です。

自然に恵まれた観光の村

山と川を
そのまま生かした
レジャーを体験
自然の中にすっぽりと
包まれる心地よさは
北山村だけのもの

豊かな自然を満喫するレジャーが北山村にはたくさんあります。季節ごとに表情を変える山や川。人工的なレジャー施設ではなく「自然とともに過ごす」が北山流です。

まずは「ラフティング」。経験豊富なプロガイドと力を合わせて、岩の間をすり抜け激流を漕ぎ下るスポーツで、一度体験するとやみつきになる楽しさ。スリルと迫力、冒険心が存分に満たされます。

おくとろ公園内にはオートキャンプ場やバンガロー、テニスコート、焼肉ハウスなどが完備。テントを張ってキャンプを楽しむ方や、温泉施設内に宿泊される方など楽しみ方は色々。

また、小森ダムではブラックバス釣りも楽しめます。

すぐそばには「おくとろ温泉」があり、ダム湖を眺めながらゆったりと温泉を堪能することができます。

筏師の道ウォーキング

かつて北山川から熊野川を下って新宮まで木材を運んだ筏師達が北山村へ帰る方法といえば徒歩しかありませんでした。櫂や棹をかつぎ、険しい山道を歩いて家族のもとにもどったのです。「筏師の道」として残されているそのルートが「筏師の道ウォーク」として年々、人気が高まってきています。現在の筏師が案内する「筏師の道」。歴史とロマンが感じられ、新しい観光資源になっています。

邪を払う「じゃばら」は北山村だけの特産品

邪気を払うほど
酸っぱいことから名付けられた
「じゃばら」は北山村だけに
自生していた「香酸柑橘」です。
柚子よりも果汁が豊富で種もなく、
地元では縁起物として
昔からお正月の料理に
欠かせないものでした。

「花粉症の症状が軽くなる」といった声がひろがり、あっと言う間に全国にその名を知られることになった「じゃばら」は北山村の特産品。そもそも、じゃばらは一人の村民の庭に1本だけ自生していたのが始まりでした。

福田国三さんの敷地内に「へんなみかん」が育つ木が1本ありました。福田さんは「みかんじゃないけど、独特の味と香りで美味い。これを増やせないか」と動き出しました。当時は誰も注目しなかったのですが、昭和46年の秋、みかんの分野で有名な田中論一郎博士に調査を依頼。翌年に「じゃばらは国内はもとより世界に類のない全く新しい品種」であることが判明したのです。さらに成分の分析や特性調査などを行い大きな期待がもてるものだとわかったのでした。村は農園を作りじゃばら栽培に力をいれていくことになるのです。

現在では7ｈａの農園（村営3.5ｈａ、民営3.5ｈａ）が山の麓にひろがり、村の大きな収入源にまでなりました。そもそも「じゃばら」とは柚子やダイダイ、カボスの仲間の柑橘類で、柚子よりも果汁が豊富なうえ独特の風味が特徴。10月から12月にかけて収穫されます。官民一体となって商品開発をおこない加工場ではさまざまな食品が誕生しています。やがて、「花粉症の症状が軽くなった」という声がひろがり、各メディアにも取り上げられ、じゃばらが売り切れるということになるほど爆発的なヒットになりました。じゃばら農園の副責任者の宇城公揮さんは春から夏の間は筏師として観光筏に乗っています。「毎日の水やりの他、除草剤を使わないので草刈や剪定、堆肥をまいたりと毎日大変ですが手間をかけるほど、いいじゃばらが実ります。」種がないじゃばらは接木で育てていきます。実がなるまでには約5年かかるので、成長をしっかり見守っていくことが大切とも言います。様々な年代の人が働く農園は明るい笑い声が絶えません。

北山な村人

じゃばら農園
副責任者　**宇城 公揮** さん

名古屋で美容師をしていた宇城さんが北山村で働きだしたのが平成19年。夏の間は筏師がメインでシーズンオフはじゃばら農園の副責任者として多忙な毎日をおくっています。「みんなで丹精込めてつくるじゃばらを使ったポン酢「じゃぽん」はどこのポン酢よりもおいしい!」自信に満ちた力強い言葉がかえってきました。

秋の収穫後は、さまざまなおいしい商品をお届けします

近年、じゃばらには花粉症の症状を抑える効果があるといわれており、全国各地からの問い合わせが急増しています。

村の特産品となった「じゃばら」は多くの雇用もうみだしました。収穫後のじゃばらをドリンクやジャムなどに加工する工場ができ、それを通信販売するためのインターネット事業もさらに活発になっていきました。もともと生産をスタートさせて順調に販売できたのではありません。村内の販売と周辺市町村への卸をメインとしてきた頃は在庫が積まれた時期もありました。交通の不便さとPR不足が原因です。これらを解消するために直接販売ができるインターネットショッピングモールへの参画をはじめました。花粉症モニターをはじめ、ネットでの売上げが急激に増加。加工場もフル稼動することになっていったのです。官民一体となって新商品の開発をすすめ、数多くの商品ができました。また、早くから栽培から販売までの6次産業を成功できたのも村が主体となって取り組んだことが大きいといわれています。農園から消費者の手元まで一貫してお届けできることが強みです。

北山村青年会は、村のPRとじゃばらのさらなる認知のためイメージキャラクター「ジャバライダー」を誕生させました。じゃばら収穫祭をはじめ県内外のさまざまなイベントに参加して広報活動に取り組んでいます。

毎年11月には収穫祭が開催されます。県内外からたくさんの出店もあり村全体で豊作をお祝いする祭りです。

酸っぱくて、美味しくて、くせになる、じゃばら商品

ドリンク、ぽん酢、ジャム、マーマレードをはじめ飴やお菓子、入浴剤などじゃばら商品が登場しています。

じゃばらジャム

パンにつけても紅茶に入れても美味しいじゃばらのジャム。毎日の朝食におすすめの人気商品。

じゃばらマーマレード

じゃばらの果皮の香りとほろ苦い味わいが楽しめます。ヨーグルトに入れても合います。

じゃばら10%ドリンク

じゃばら果汁10%のストレートドリンク。ほどよい酸味と旨みが人気です。

じゃばら果汁

苦くて旨いと人気のじゃばら果汁100%のストレート果汁。いろんな料理に使えるうえに焼酎にもぴったり。

じゃばらポン酢じゃぽん

じゃばらだけの風味にこだわり、1本1本手作りで仕上げました。コクと旨みが効いています。

村長インタビュー

北山村 ブランド化計画

北山村長　奥田　貢

これまで、全国唯一のものとして「とび地」と「観光筏下り」をアピールしてきた北山村。特産品である「じゃばら」も加わり、さらに特化させ付加価値をつけて北山村をブランド化していくために必要なものは何か?高齢化、過疎化が進む現在の北山村と未来の北山村について語ります。

村長の出身地はここ北山村ですが?

私は、小学校四年まで北山村で育ちました。5歳の時に亡くなった父は筏師だったんですよ。社会に出て、国土交通省(旧　建設省)に勤めていたので枚方に住んでいましたが、15年前56歳の時に戻ってきました。村長になったのは、その2年後の58歳の時です。当時と比べると便利になりましたよ。インターネットの普及で都会も田舎も情報は同時に得られます。道路もどんどん改良されて人の行き来も格段に変わりました。ずっとこの地に暮らしていたらわからなかったかも知れない北山村の魅力も、離れていた時期があったからこそわかることを実感しましたね。

具体的にどういったところですか?

まず一番は何と言っても豊かな自然です。そして心豊かな住民とこの村ならではの歴史です。周囲を三重県と奈良県に囲まれているのに和歌山県であるのは、良質な杉材に恵まれたということがその要因ですね。林業が発展しその木材を筏に組んで北山川を流し新宮市まで運んだ歴史と産業は、豊かな自然があればこそです。

その筏の技術が今は観光筏下りとして村の観光資源になっていますね。

６００年の歴史ある筏師の技術は北山川が育てたといっても過言ではないといわれています。鋭角にむきだす岩肌と激流を筏で下っていくのですから命がけです。昭和30年代に戦後復興の電力エネルギー確保の国策から池原七色・小森と三つのダムが出来た事と、木材輸送が車に変わったことから筏師の仕事がなくなってしまいましたが、先人達の知恵と努力で伝統技術を継承しつつ観光筏下りとして復活させたのです。今では春から夏の期間中、全国から観光客が来てくれるようになりました。現在、11名の筏師のほとんどはＩターンです。もともと村にいる人やＵターンは少数ですね。今、村の課題は働く場所の確保です。生活の基盤になるものをしっかり作らないと若者も戻ってきません。家族を養うためにも、ある程度の年収は稼がないといけませんからね。村の人口は５００人をきりました。その内の48％が高齢者です。２０２５年には団塊世代がピークを迎える。何もしなければ人口は減っていく一方で村はさびれていきます。そうならないためにも皆で知恵を出していかないといけない。

住民全員でということですか?

小さな村ですから役場の職員もおくとろ温泉でサービス業もします。筏師はじゃばらの栽培や加工もします。自分達で村を守っているのが北山村の強みでもあるのです。これから、さらに力を入れていくのは「観光」です。筏と温泉があればいいのではなく、進化させていかなければいけないと思っています。何をどんな方法で魅力を磨いていくか、どんなふうに発信していくか、継続させ、また進化し続けていくこと。これが、北山村を元気に存続させていくひとつ目ですね。

特産品の「じゃばら」もありますね。

北山村だけにしか自生しない柑橘として「じゃばら」をＰＲしてきました。また、ここ数年来は花粉症の症状を軽減させる効果があるとして注目もされ、飛躍的に人気も高まり加工品の生産が追いつかないほどにもなりました。しかし、こういう事は永遠には続かないですよ。じゃばらはジャムやぽん酢などの食品だけでなく、サプリメント、シャンプー、化粧品まで作りました。色んな分野に広げたんです。でもね、そろそろ的を絞っていかないといけないんじゃないかと思っているんです。じゃばら農園を運営されている方々と商品開発の話を続けていますが、特化したものを決めなければいけない。しっかりとしたブランドに仕上げていく時期だと考えています。「じゃばら北山村」というブランドをね。いくら自分達がブランド、ブランドと言ってもそれはブランドじゃない。お客様に付加価値を感じてもらい、広めてもらい、たくさんの人が知っていることがブランドなんです。お客さんがブランドを作ってくれるものなんです。私達はそういうものを意識して作り、発信しなければいけない。栽培から販売までを一貫する6次産業のモデルとして北山村は早くから取り組んでいました。民ではなく官だからこそできたと思います。

収穫量は安定しているのですか?

いやいや、やはり自然と共に栽培していくので、その年の天候によって変わります。最盛期は１００トン以上だったけれど、平成25年は70～80トン台です。じゃばらは接木でないと成長しない柑橘で、苗木にして2年、そこから5年かけて収穫できるものなんです。人間と一緒で再生がきかないので、世代交代が必要なんですよ。実をつけなくなった木を新しい木に替えていくんです。じゃばら商品の付加価値をどこまでつけられるか。村の基幹産業としてこれからも発展させるためにも、的をしぼってしっかりとしたブランドに育てていく方法を皆で考えていきます。

じゃばらと筏下りを北山村ブランド化の要にしていくのですね。

そのためにも私が一番力を入れていきたいのが「教育と子育て」なんです。単に人口が増えていけばいいというのではなくて、この過疎の状況を受け入れていくことも大切です。私は「適疎(てきそ)」という言葉をこれからどんどん使っていきます。過疎でもなく過密でもない、適疎。かつては2，０００人いた村が今では５００人を切っている現在を嘆くのではなく、この地域に見合う人口だと思って一人ひとりが取り組んでいくことが村を強くすることであり、若者を増やしていくポイントだと思うのです。発想の転換です。小さな村だからこそできること、大きな市町ではできないことを「強み」に変えていくのです。

「じゃばら」「筏」「ブログなどのＩＣＴ」この3つにプラス1。4つの柱ではないんですよ。プラス1。これがポイント。何がプラスされるかというと、先に言った「教育と子育て」です。保育料を無料、就学するまでの医療費を無料にするといった支援の他、中学校の修学旅行先は海外へ。外国人教師による英語教育を小学校から始める。パソコンは一人一台。田舎だから知らないとか、とび地だからできないというのではなく子ども達には精一杯のことをしていきたいんです。村の宝物ですからね。豊かな自然の中で心豊かな大人になってほしいと願います。

教育

グローバル社会に対応できる子ども達を育てる

小・中一貫のカリキュラムを実践

北山村が最も力を注いでいるのが「教育」です。村の宝物である子ども達に小さな村だから、とか僻地だからといったマイナス面を感じさせない教育を存分に受けてもらいたいというのが村民の願いです。安心して子どもを産み育ててもらうために保育料は無料にしています。隣には福祉センター、診療所があることから、ヘルパーさんと一緒にお年寄りが来て、園内で元気いっぱい遊ぶ園児たちとコミュニケーションをとるように自然となりました。これらのソフト面の充実さから県境を越えて三重県から北山村の保育園に通う子どももいるほどです。

小中一貫教育は心も育てる教育

小学校と中学校がひとつの敷地内にあり、小中連携教育の取り組みをしています。9年間を見通した教育活動が実現でき、21年度からは教職員も合同になりました。小中合同研究授業、中学生が調べた内容を小学生に発表するなど、コミュニケーションも活発です。さらに語学教育の充実のため、村では21年度より単独でALTを雇用し、保育園から中学校まで各学年で週2～3時間の外国語活動にも取り組んでいます。一貫したカリキュラムを研究しながら、これからの国際化社会に対応できる人材の育成に努めています。国際理解教育の一環として中学校の修学旅行は海外へ。これまでロンドン、アイルランド、シンガポールなどへ行き現地の人達に積極的に話しかけるなどしています。また他校との交流学習も積極的に取り入れています。新宮市光洋中学校とは長年の交流を続けており、卓球部の練習試合や授業や学校行事の参加など行っています。

シンガポールへ修学旅行にいきました。

ALTの授業中はすべて英語でおこなわれます。
授業中も笑い声が聞こえるほど楽しい時間。

小学校の英語授業ではギターの生演奏とともに
ビートルズの歌を元気いっぱい唄っています。

給食は小・中学校の生徒達がランチルームで一緒に食事をします。毎日趣向を凝らした献立は「ものがたりこんだて」。本の中にでてくるメニューを再現し、メニュー紹介の前には本も置かれて読書への興味が自然ともてるようにしています。学校生活は子ども達への愛情にあふれています。

木を活かす

高齢化とともに林業の衰退がすすみ、放置された間伐材の活用と村内エネルギーの自給自足を目的に「バイオマスエネルギー」に取り込んでいます。今後、役場や学校などの公共施設にも取り入れていくことも考えています。

新たな林業の特性
自然エネルギーの
地産地消

古来より森の恵みが北山村を支えてきました。村の98%が森林で、江戸時代から高度成長期までの長い間、良質な北山村の杉や檜は主に関東方面に出荷され続けていました。近年、海外から輸入材がはいってきたことが林業の衰退へとつながり、さらに後継者不足がそれを加速するかたちとなってきました。しかし、国と県による「緑の雇用」と森林組合の活動により、村の大きな財産である林業を活性化させる動きもでています。

また、村独自の取り組みとして、放置された間伐材を環境にやさしい新たなエネルギー源にしようという「バイオマスタウン構想」をすすめています。薪を使うことで電力、重油の消費を減らし、発電設備も併せて導入することで災害時の緊急電源としてエネルギーシステムの構築も考えています。現在、おくとろ温泉のボイラーを重油と薪との併用に変えたことで、重油の消費を抑えつつ、CO_2の大幅削減が実現しました。自然と共生するなか培われてきたバイオマス利活用の知恵と文化を活かし、暮らしと観光につなげていくことに取り組んでいます。さらに近年では、村内の小中学校の屋上に太陽光発電を設置し、自然エネルギーを暮らしにいかしています。

できるだけ自然エネルギーを活用し、地球環境にやさしい村を目指す北山村では学校などに太陽光パネルを導入しています。村のエネルギー源としてバイオマスと太陽光を活用する取り組みを強化していきます。

安福充実した福祉サービスで安心な暮らし

高齢化率が48％と約2人に1人がお年寄りの北山村。若者の定住率が下がる一方この数字を支えているのが、行政の力はもちろん地域みんなでお互いを支え合う相互扶助の精神が大きな支えとなっています。その根拠を示すものとして「孤独死」という言葉がありません。お年寄りにとって地域の子どもや日々のお付き合いが何よりの心の支えとなっています。〝小さい村だからから出来る事〟がこの北山村の大きな魅力でもあります。地域の「北山村立北山保育所」「国保北山村診療所」「高齢者生活福祉センター」が隣接しているのも子どもの顔が見える生活でお年寄りの生きる活力にもつながっています。また独居生活の方には安価でかつ便利に活用できる自家用有償運送などを活用し、今後もＮＰＯと連携した過疎地有償運送などを取り入れ、さらに介護予防や健康管理を推進し、福祉医療事業等の現サービス水準を低下させないように取り組んでいきます。よりよいサービスだけが老後の生活を充実させるものとは限りません。北山村の四季折々に美しさを見せてくれる自然、その自然の恵みを受けて体を流れる空気がどんなサービスよりも人のこころを癒しています。

万が一のために、村民の安心と安全のために

近年、大規模な自然災害が全国的に増えています。県内でも台風の被害が山間部を襲うという悲しい現実もあり、村としても住民の命と財産を守るためあらゆる取り組みをしています。自主防災活動の強化と防災訓練の実施の他、防災拠点の整備と新設、さらには万一の災害時の近隣市町村との連携などに重点をおいています。特に土砂災害に対する備えは最重要項目として特に土砂災害に対する備えは最重要項目として取り組んでいます。

村の発展と住民の暮らしを豊かにするために

北山村にとって過疎化・高齢化対策、観光振興、道路整備は長年の課題となっていますが、村民の代表である6名の議員により、年4回の定例議会と必要に応じて臨時議会を開くなどして着実に施策方針を実行しています。

小さな村だからこその特性を住みやすさにするため、子育てのしやすい環境、介護予防や健康管理を推進するとともにライフラインの整備もすすめられています。同時に災害緊急時の周辺市町村との連携を強化するとともに自主防災活動や災害を想定した訓練の推進など、村民の安全と、安心できる暮らしのために活発な審議が展開されています。また、高速道路の開通により東海方面からの観光客増加を見込んでのさまざまな取り組みと観光施策を検討しています。

おくとろ公園の桜。春にはお弁当を広げる家族連れで賑わいます。

秋早朝の北山の山々。山の間を泳ぐように霧が流れます。

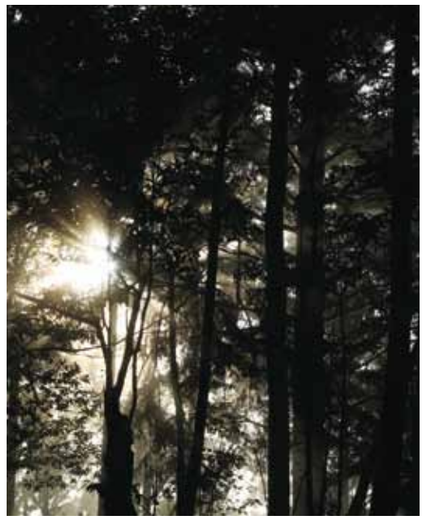
冬の小森ダム湖の夜景

冬の小森ダム湖

エメラルドグリーンの小森ダム湖に舞う桜の花びら。絵画のような美しさです。

うつくしの村

春・夏・秋・冬



MESSAGE

北山村長　奥田　貢（おくだ　みつぐ）

新たな地域の創造を目指して

三重県、奈良県に囲まれた和歌山県北山村は、全国唯一の飛び地の村であります。明治22年の村制施行以来100有余年を経過いたしました。

北山村は、古くから良質の杉に恵まれ林業と、その木材を筏に組んで北山川を流す筏師の村として栄えてまいりました。

しかし、昭和30年代のダム建設により住民の生活基盤は大きな変革を余儀なくされ、地域の衰退と相俟って住民は苦難の道を歩んでまいりました。このような状況の中、先人達のたゆまざるご努力により、伝統技術の復活と継承を図ることとして筏流しを観光筏下りとして復活、地域特産の柑橘「じゃばら」を活かした地場産業の活性化など取り組んできました。

また、近年では、ICT時代に対応した情報通信の充実、環境に配慮し自然環境を活かした観光産業の推進、道路整備の促進による交通アクセスの改善と防災力の向上等の諸施策に取り組んでまいりました。

一方で、国の方針であった平成の大合併も「自らの地域は自らが守って行く」ことへの強い想いから合併を拒否し、単独で自立していく道を選びました。前途は大変厳しいものがありましたが、住民の皆様の強い意志とご協力をいただき北山村という地域を守ってまいりました。

これからの地方は、地域固有の資源を活かし自立性の高い個性ある地域づくりが求められています。先人達から受け継いだ伝統文化である筏、特産物じゃばらに加えて、豊かな自然環境を活かしたアウトドアやジオパークなどの新しい北山村資源を活用した地域振興策に取り組んでまいります。

少子高齢化、過疎化と多くの課題がありますが、過疎だ少子化だ高齢化だと悩んでいても仕方がない、みんなが力を合わせて、北山村が過疎でもない、これがこの地域に見合った適疎な地域であると、発想を変えて、これからの地域づくりに皆様と力を合わせて頑張ってまいりたいと考えております。

村外の皆様も是非一度、自然豊かな北山村へおいで下さい。

村民一同心よりお待ちいたしております。